

ハートル夫人の二通の手紙

— トロロープの『今の生き方』の翻訳を題材として —

木下 善貞

「福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要」第二〇号抜刷

2022（令和4）年12月

ハートル夫人の二通の手紙

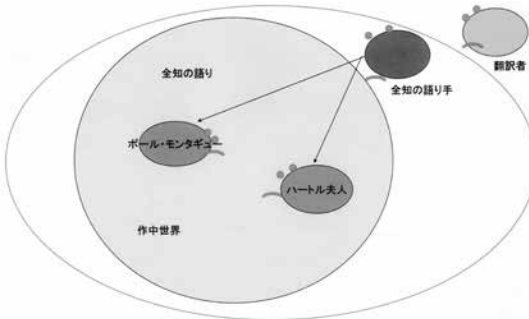
— トロロープの『今の生き方』の翻訳を題材として —

木 下 善 貞

1. はじめに

本稿^①はアンソニー・トロロープの『今の生き方』(*The Way We Live Now*, 18745)を翻訳していくなかでジェンダーという観点から気づいた作中人物ポール・モンタギューとウィニフレッド・ハートル夫人の関係を特に取りあげて論じてみたい。翻訳者がどういうところに配慮しながら仕事をしているか明らかにできればいいと思う。

2. 人物関係



問題となる人物関係を図式化すると左のよう^②になるだろう。

外側にいる翻訳者は私、全知の語り手はトロロープの語り手、灰色のところは作中世界だが、作中人物はポール

・モンタギューとハートル夫人だ。作中人物二人の関係をとりあげるといことは、当事者としてこの二人と、二人を扱う全知の語り手と、さらにその外郭にいる翻訳者の私を取り扱うということだ。四者それぞれが目と口、視点と声を具えており、四者それぞれが別個のジェンダーやセクシュアリ

ティを具えている。

ジェンダーやセクシュアリティに焦点を当てながら、ポールとハートル夫人がどう性格づけられているか、ポールとハートル夫人がどう振る舞うか、語り手がそういう二人をどう扱うか、これらを把握した翻訳者は具体的にどう表現に当たったらいいか、こういうことを順番に議論してみたい。

3. ハートル夫人の弁明

時代は1872年のこと。若いイギリス人ポール・モンタギューはサンフランシスコからの帰英の旅で道連れになった美しい米国女性ウィニフレッド・ハートル夫人に魅惑され、ほどなくして婚約する。しかし、ポールは再びサンフランシスコを訪れたとき、ハートル夫人に関するいろいろな噂を聞いて、婚約の破棄を決意し、別れの手紙を夫人に送る。

その噂というのは、①ハートル夫人はオレゴンで男を銃撃して殺した。②ハートル夫人は夫のカラドック・ハートルと決闘した。③ハートル夫人は夫が死んだと言っていたが、ほんとうは生きている、というものだ。

ハートル夫人はポールの別れの手紙を米国で受け取ったあと、資産を取り戻す裁判のため手間取るけれど、裁判が決着するとすぐ彼を追って渡英し、婚約は生きていると主張、それぞれの噂について弁明する。

噂については火のないところに煙は立たずのことわざ通りだ。弁明について特筆すべき点は、夫人がカンザス州の法律にのっとって正式に前夫と離婚したこと、前夫のその後の消息を知らず、「今でも前夫は死んだと信じている」^③こと、米国で離婚が成立したからにはイギリスで再婚について差別されるのはダブルスタンダードだと主張することだろう。

ポールは弁明を夫人から聞いたあと、結局再度別れの手紙を夫人に書くことになる。この間に夫人がポールに送る二通の手紙をどう翻訳したらいいか、それがこの発表の中心課題だ。

4. ハートル夫人の性格づけ

ポールが噂に聞いた①②③点に対するハートル夫人の弁明を見ると、夫人の性格づけがはっきりわかる。夫人は自分の命を守るために男を拳銃で殺し、酔った夫を寝室に入れないように拳銃を用い、離婚の訴訟を起こし、資産を守るため裁判で争う。「残酷さと闘い、不正と闘い、詐欺や裏切と闘って」(357)いる。夫人は闘争的で、男性的特質を強く具えている。これはハートル夫人を描くとき、強調される山猫の爪、鞭、ナイフ、拳銃に象徴的に表現されている。



山猫の爪、鞭、ナイフ、拳銃は攻撃的な男性の記号phallic symbolだ。ハートル夫人は男性の記号を具えて、「暴力や粗野な生き方や女性らしくない言葉」(360)に染まり、

男性的な性格も持っている。

夫人は「女らしさ」というジェンダー制約や枠を超えて、女性でありながら男性性も具える、つまり両性具有的 (androgynous) な人物として性格づけられている。

ハートル夫人は男性的な性格を具えているけれど、一方でじつに女性的、献身的、自己否定的だ。これはのちに夫人の第一の手紙で明らかになるだろう。

5. ポール・モンタギューの性格づけ

ポールはハートル夫人と出会ったとき、一方的にのぼせあがり、「当初夫人の魅力に愚かにも幾度も屈服し」(354)、夫人の過去を問いただすことなく婚約に突き進む。彼は夫人との別れを決意して最初の別れの手紙を書いたあとも、渡英して来た夫人を観劇に連れて行ったり、保養地ローストフト

のホテルに一緒に行ったりして、ぐずぐずと別れを遅延させる。彼は夫人のどこに惹かれているのか？ 夫人はポールに「女性が鞭を振るうというような意見を持つのは、紳士にはきつと——おもしろくて——心地よいものなんです」(388)とほのめかす。ポールが夫人に惹かれるのは、鞭を持つ女性、男性の記号を持つ女性に惹かれるからであり、それが彼のマゾ的セクシュアリティに訴えるからだ。

女性を見ると強い去勢脅迫を感じる男性は、むしろ男性の記号を具えた女性のほうに安らぎを感じ、魅惑されるという。phallic symbolが去勢脅迫をなだめてくれるからだ。つまりポールはマゾ的セクシュアリティを具えた人物として性格づけられている。

6. 語り手はポールをどう見ているか？

語り手はポールが「ハートル夫人の信頼を裏切ったこと（つまり婚約を破棄したこと）についても、ふつうの女なら誰も彼に厳しく当たらないだろう」(354)と言う。ここで言う「ふつうの女」は語り手のジェンダー認識の表れだ。つまり、語り手はハートル夫人の行く末についてじつに冷淡で、ポールが夫人と別れることを当然と見ている。同じように、語り手はハートル夫人の弁明を聞いたあとのポールの内面を描くとき、「(夫人は)拳銃の扱いにも慣れ、男の仕事をたくさんしてきたから、ふつうの男なら彼女の主人となることをためらっても驚くに当たらない」(358)と言う。つまり、語り手はポールが「ふつうの男」のジェンダー認識に立ち返れば、当然夫人を捨てるべきで、彼のマゾ的セクシュアリティを捻じ伏せる必要があると見ている。ここで言う「ふつうの男」とは、語り手もポールも認める^④イギリス紳士のジェンダー規範^⑤だ。

7. ハートル夫人が主張する英米のジェンダー認識の違い

イギリスという「軟弱な文明」において「女性は守られて」いるので、米国の事情は「理解できない」(356)とハートル夫人は主張する。

物語の舞台となった1872年のイギリスは、一般的に見て大英帝国華やかかなりしパックス・ブリタニカの延長線上にあり、国内的には文明化され、親和化された社会を形成していた。いわゆるVictorianismの時代だ。男性のジェンダーとしてはすでに述べた「紳士」の理想が追求され、女性のジェンダーとしては「家庭の天使」の理想が喧伝されていた。

一方、米国西部は、舞台となった1872年には開拓時代の真っ只中だった。(大陸横断鉄道の完成が1869年、フロンティアの消滅が1890年。)スー族やシャイアン族やモードック族が絶望的な戦いを繰り返していたころ。ビリー・ザ・キッドやジェシー・ジェイムズのようなガンマンが活躍した時代だ。OK牧場の決闘があったのが1881年だ。つまり銃の使用は日常茶飯事だったわけだ。

この時代の米国西部フロンティアの女性たち^⑥は、一般的に見て荒々しい自由な環境のなかで、たくさん仕事を抱え、自分で決断し、処理しなければならなかった。フロンティアの女性たちは自助、共助の精神を具えて、自立していなければならなかった。女性の数が少なかったこともあって、だいにされ、発言権もあった。この点、女性についての米国のジェンダー認識は、一般に女性たちが守られて、受け身的だったイギリスのそれとは異なっていたと言える。

しかし、米国西部でも、やはり女性が女らしさを求められていたことには間違いがない。男を銃で撃ち、夫を銃で追い払ったハートル夫人は、米国西部のジェンダー規範に照らしてみても、おそらくカラミティー・ジェーン（馬と銃の扱いに長け、男装して軍の斥候として働いた）と肩を並べるくらい、ふつうの「女らしさ」から逸脱していたと思われる。語り手は夫人が「暴力のことで（西部で）語りぐさになっていた」（361）と言っている。親和的社会イギリスの住人のジェンダー規範に照らすとき、夫人が忌避されるのは当然と言えるだろう。

8. 語り手はハートル夫人をどう見ているか？

語り手はポールにかかわるハートル夫人の行く末についてじつに冷淡だとすでに述べた。語り手はこの物語のなかで男女の三角関係をたくさん扱って

おり、ポールとヘンリエッタ（ヘッタ）・カーベリーとハートル夫人という三角関係も^⑦その一環として扱っている。語り手はポールがハートル夫人と別れたあと、「家庭の天使」であるヘッタと結婚するというプロットを描かなければならない。語り手はこういうプロット上ハートル夫人にはできるだけすんなりと物語から退場してもらわなければならない。もともと語り手は女性的なヘッタと男性的なハートル夫人を対照的に描くため、夫人には男性の記号をdeviceとして利用した。しかし、ハートル夫人が持ち前の山猫的性格（男性的攻撃性）を見せて、ポールとヘッタの関係を力づくで妨害するような状況が生じては、プロット上好ましくない。それで、語り手はポールとヘッタの関係が深まるころから、初期に設定したハートル夫人の山猫的性格を骨抜きにし、ポールから身を退くように操作^⑧していく。

9. ポールからすんなりハートル夫人に身を退かせようとする語り手の操作

(I) 内面描写の例。語り手は夫人がイギリスでの生活を悲観的に見て、ポールをすんなりあきらめるところを描く。

夫人は彼から手紙を受け取ったあと、急いで渡英してみたものの、本心ではこれが無駄なことだと思っていた。その手紙が届いたとき、夫人はかなり怒った。しかし、夫人の特徴である性格上のあの強さを表して、この彼の決定がうなずけるものだと思中納得していた。夫人と結婚したら、彼は昔の仲間や昔のたまり場をみなあきらめなければならない。まわりの状況全体が変わってしまうだろう。夫人は自分についても、イギリス女性についてもよく知っていたから、彼女の過去がイギリスの人々に知られるとき、——そういうことはよくあることだ——、イギリスで排斥されることを確信していた。夫人はこの古い国について話すとき、よく嘲りを交えて話したけれど、米国の男女にしばしば見られるように、イギリスの優越性についてほとんど羨望に似た賞賛をそこに混ぜ合わせていた。彼女は過去を忘れて、イギリス女性として生活することが

できたら、それを天国とも思ったことだろう。しかし、彼女は自国の東部の町でときには嘲られ、ときには恐れられ、はるか遠い西部で暴力のことではほとんど語りぐさになっていたから、——イギリスで運命がそんなふうに一変することをどうして期待することができるだろうか？
(360-1)

ハートル夫人はオレゴンの男や、カラドック・ハートルや、離婚や、資産の訴訟について発言するとき、男女平等を強く主張し、精一杯それを行動で表している。これがイギリスで夫人が受け入れられない真の原因だが、語り手は男たちの酒癖や性癖を取りあげるのではなく、夫人の暴力のみを「語りぐさ」として取りあげて、彼女がイギリスで受け入れられない原因としている。夫人はポールとの婚約を信じ、独り（大陸横断鉄道と大西洋航路の）長旅をして彼を追って来た。ロンドンに着くと、彼との接触の試みを繰り返し、メキシコ出張の話があったときは、一緒にメキシコへ行こうと彼に申し出る。夫人は「イギリスでは幸せが訪れないとしても、はるか遠い西部で」なら、あるいは「過去のことを問題にしない国と一緒に行くことができれば」と、本心ではポールとの幸せな生活を願っている。だから、夫人は彼との関係では積極的、前向きに行動している。しかし、語り手は夫人が渡英の旅を「無駄」なことだと観念していたと言い、ポールとの別れを「納得」しているように語っている。

(Ⅱ) ポールからすんなりハートル夫人に身を退かせようとする語り手の操作。会話の例。語り手は物語の最終盤になって（92章）ポールがフィスカーという米国の共同経営者と会話する次のような一節を収録する。

「うん、(夫のハートルは夫人が) ロンドンにいることは知っています。ハートルはフリスコにいるんですが、彼女のあとを追ってこちらに來たときっぱり言い切っています。ただ金を持っていないだけで、できれば來たいんです」(と、フィスカー)

「やはり夫は死んでいないんですね？」と、ポールはつぶやいた。

「死んだって！——いや、とても死にそうにありません。夫人はいつかあいつに会ってひどい目にあうでしょう」

「でも、彼女は離婚したんでしょう」

「彼女はカンザスの弁護士にそう言わせましたが、夫のほうはフリスコの弁護士に離婚というようなことはないと言わせたんです。…」(691)

語り手は最終盤になってこのようにハートル夫人の離婚を否定する。夫人はあくまでも「夫人」であり、はっきり独身とは言えないということだ。語り手はこの点を見越して夫人を「夫人」と呼び続けてきたわけだ。

夫人自身は離婚の訴訟のころから夫についてはどうなったか知らない、夫は死んだと信じていると言っており、内面を吐露するときも、発話するときも、サンフランシスコの裁定のことにふれていないので、この裁定についてはまったく知らなかったと思われる。

この会話部分はハートル夫人のあらゆる闘い、もがきを一挙に悲劇的にする。夫人は逃れようとしても逃れられない檻に閉じ込められた山猫だったのだ。ポールを求めて独り長旅をしてきたのも、救いを求める一縷の望みに託してのことだった。イギリスでの、メキシコでの新しい生活は檻から抜け出そうとする夫人のかなわぬ夢だったわけだ。

語り手はこういう夫人について山猫的性格を骨抜きにして描くとき、語り手もまた夫人を檻に入れ、夫人の悲劇に手を貸しているように読者には感じられる。男女平等を強く体現し、檻から抜け出そうともがくハートル夫人のほうが、ステレオタイプ的で限定的な語り手のジェンダー操作より、現代の読者には^⑨身近に感じられる。

10. ハートル夫人の第一の手紙

さて、ポールやハートル夫人という作中人物がどう性格づけられているか、語り手が彼らをどう扱っているか見てきた。社会的、文化的背景を異にする翻訳者が英語で書かれた作中人物や語り手の関係を正確にとらえるのは難しいことだ。しかし、翻訳者はさらに難しい課題を抱えている。日本語には敬

語体、丁寧体、普通体という基本的な文体のほかに、男言葉や女言葉があり、それらの下品な俗語体や、方言もある。翻訳者は作中人物のジェンダー認識について正確に把握していなければ、その人物の発話に手をつけることができない。では、具体的にハートル夫人の二通の手紙を考えていきたい。

ハートル夫人は噂について弁明したあと、ポールの主張を受け入れて、身を引く決意をし、(つまり語り手の意向にも沿うかたちで)第一の手紙を書く。翻訳者はその手紙を次のように訳すことにした。

愛するポール

あなたが正しくて、私が間違っていました。私たちはたとえ結婚してもうまくいかなかったでしょう。あなたを責めるようなことはいたしません。あなたとご一緒させていただいているとき、私はあなたを魅惑することができました。でも、そんな魅惑に陥っても、ご自分の人生を投げ出してはならないことを、あなたは学んでおられるし、正しく学んでおられます。私があるに乱暴な振る舞いをしたとしたら、お許してください。私が苦しんできたことはおわかりでしょう。

ほかのどの女性がお慕いするよりも、あなたをお慕いしている一人の女が、ここにいることをいつも覚えておいてください。たとえばかの女性があなたのそばにおられても、あなたから愛していただいていると私はやはり思っています。神があなたを祝福し、幸せにしてくださいませようお祈りいたします。私に短い言葉、いちばん短い別れの言葉を書いてください。書いてくださらないと、あなたはご自分を薄情と思わずにいられなくなります。でも、私のところにはいらっしやらないでください。

いつもあなたのものである、W・H (362)

「魅惑に陥っても、ご自分の人生を投げ出してはならない」の部分で、ポールがハートル夫人に感じる魅惑より、(つまり彼の性的志向の充足より、)ジェンダー認識に基づく規範を重視したことを夫人は正しくとらえている。夫人が知的に優れた人である証拠だ。

したがって、あまりに女性っぽい表現 (たとえば「あたしがあなたに乱暴

な振る舞いをしたとしたら、許してちょうだい。あたしが苦しんできたことはおわかりでしょ) というような女言葉の普通文の使用は、知的レベルの高い夫人の発話の仕方になじまないと判断した。

ハートル夫人は男性的性格も持つと言うから、俗悪な男言葉を用いた（たとえば、「おれがあんたに乱暴な振る舞いをしたっつーんなら、許してくれ。おれが苦しんできたことはわかるだろーぜ」というような）発話も選択肢としてないわけではないが、コンテクストが自己否定的な身を退く内容で、男言葉に出る幕はないと判断した。

このような文体の選択のなかに翻訳者である私のジェンダー認識が現れてくると理解している。

訳は「ですます調」の丁寧文かその敬語体だろうが、手紙なので敬語体がふさわしいと思った。

余談だが、第一の手紙には次の二か所に非人称主語構文 (impersonal construction) があり、両方とも仮定法だ。

Our marriage would not have been fitting.

Not to do so would make you think yourself heartless.

翻訳者はこれを

「私たちはたとえ結婚してもうまくいかなかったでしょう」

「書いてくださらないと、あなたのご自分を薄情と思わずにいられなくなります」

と、人を主語にして訳した。

英語を日本語に訳すとき、翻訳者は作中人物の発話スタイルを統一させることと、英語で多用される非人称主語構文を処理することにいちばん気を遣う。翻訳者は作中人物の発話スタイルを統一させるため、彼らのジェンダー認識の把握に努める。非人称主語構文については、人を主語にして書き換えるのが正しい解決策だと信じている。日本語には人を主語にするとすんなり文章が続き、頭に入りやすいという特質があると思う。古文では、主語である人が省略されても読めることをみんなが体験している。日本人は主語を人にして文を作るという感覚を意識の奥深くにしみ込ませているのだと思う。翻訳者が英語の非人称主語をそのまま用いて日本語にすれば、いかにもごつ

ごつとした翻訳調の文を作って、2ページも読者に読ませることはできない。主語を視点的人物に揃えて、ほとんど主語を出さなくてもすらすら読めるようにするのが翻訳者の腕の見せどころだと思う。

11. ハートル夫人の第二の手紙

ハートル夫人は第一の手紙を投函できずにいる。ポールは夫人を訪問するという約束をはたす前に夫人に手紙を書いて、ヘッタとの経緯を詳しく述べ、与えた損害を埋め合わせることも、懲罰を受けることも覚悟していると言い、再度別れてくれるよう求める。夫人は訪問すると約束したのに来ないで、別れの手紙を寄こしたポールにヘッタのこともあって激怒し、第二の手紙を書く。

12. 中性語と男性語を用いた普通体による第二の手紙訳

翻訳者は初め^⑩次のように第二の手紙を訳した。

ポール・モンタギューさま——

私はたくさん非道な仕打ちにあってきたけれど、いろいろな非道のなかでもこれほどひどい、許し難い、——男らしくない仕打ちにはあったことがない。あなたのようにここまで卑怯者で、ここまで不実な嘘つきには会ったことがない。私が滅ぼした哀れな卑劣漢は、酒に狂って、ただ身勝手な振る舞いをしただけ。カラドック・ハートルでさえこんな悪事を計画したことはないね。何ということをしてくれるんだ。——あなたは男女を結びつけるもっとも厳かな義務で私と結びついたあと、——その結びつきが私の全生活に深く浸透するころになって——、これがあなたの考えに合わないから、もう続けても無駄だとでも言いたいんだろうか？ よく考えてみると、アメリカの妻がイギリスの娘ほどもあなたを快適にしてくれないとわかるので、——それで続けてもみな無駄だと言うんだろ！ 私には兄も、身近な男性もいない。——もしいたら、

あなたにこんなことをする勇気はないね。あなたは卑怯者に違いない。

あなたは償いについて言っている！ 金のことを言っているんだろ？ そうははっきり言ってはいないが、金を意味しているに違いない。それはいちばんひどい侮辱だろ。だが、懲罰についても言っている。やい。おれはあんたに懲罰を加えてやるぜ、ってね。約束通りあんたは私のところに来てくれ。——来てくれたら私の手に鞭が握られているのがわかる。息切れするまであんたを鞭打ってやるぞ。そのあと、あんたにどうする勇気があるか——暴行の罪で私を裁判所に突き出すか——見てみよう。

そうだな。来てくれ。来させるよ。私がする歓待は今教えたろ。この手紙が届くころには鞭を買っておくよ。そんな武器の選び方を私が心得ていることをあなたにわからせてやる。あなたに来るよう求める。だが、もしあなたが恐れて、約束を破るなら、私があなたのところへ行くからな。あなたがいられなくなるくらいロンドンを熱くしてやる。——あなたを見つけ出せなかったら、あなたの仲間みなに私の話を持って行くからな。

今私の精神状態をできるだけ正確にあなたに伝えた。

ウィニフレッド・ハートル(385-6)

第二の手紙はハートル夫人がポールに報復を予告する男性的で、脅迫的な内容となっている。翻訳者は中性語と男性語主体の普通体を用いることで、ハートル夫人の山猫的攻撃性を強調することができると考えた。ハートル夫人がさまざまな力によって山猫的性格を封じられるなか、発話だけでもポールに一矢報いる機会となるこの手紙では、最大限山猫として発言してもらいたいと思った。このように男性語を用いることで、女性的な第一の手紙との対照性も演出できると考えた。

しかしながら、翻訳者は第二の手紙をこのように男性語で満たした場合、第一の手紙の女性的な性格からは独立したペルソナを夫人に出現させ、夫人の人格を二つに分裂させることになる。すると、夫人は二重人格者なのかという疑問を読者に生じさせてしまう。夫人は決して二重人格者ではない。時々

ある条件を満たすときに山猫的性格を出現させるにすぎない。ということは、ハートル夫人が両性具有的性格を持つと前に述べたが、それだけでは漠然とした規定の仕方で終わっていたことになる。夫人は男性的攻撃的性格をどれくらいの確率で出現させるか、それを出現させたときの攻撃性にどれくらいの強度を見せるか、もっとはっきり確定しておく必要があったわけだ。たとえば、リボンの騎士やオスカルのように男性的性格を100パーセントの確率で出現させて、強い攻撃性を見せる両性的女性もいる。ウルフのオーランドーのように並程度の攻撃性を持つ男性から（時々男装して後戻りしつつ結局）100パーセントの確率で女性性を示す人格に入れ替わる両性具有^⑩もある。しかし、そのような極端な例ばかりでなく、男性あるいは女性が人格の統合性を保ったまま何割かの確率で異性の性格を現すのも両性具有的と言って、こちらのほうが大多数だろう。『嵐が丘』のキャサリン・アーンショーはまったく女性的で（つまり普段は0パーセントの確率で男性性を示して）、並程度の攻撃性しか持たないが、I am Heathcliffと言っている。最新のジェンダーサイエンスによると、男女の別なく人の脳の90パーセントが男性的な反応、女性的な反応、中性的な反応をばらばらに示す「男女モザイク脳」^⑪となっているそうだ。つまり、大多数の人の脳は両性的であり、男性だけ、女性だけに偏った脳は10パーセントにすぎないという。

ということで、男性的攻撃的性格がハートル夫人の人格に現れる確率と攻撃性の強度を確定しておかなければならない。ハートル夫人の場合、男から生命の危険を脅かされたとき、夫から性役割を強制されたとき、資産で男女差別を受けたとき、つまりジェンダーの非対称性を契機に男性的攻撃性を出現させており、日常的には女性性を支配的な性格としている。それでも、「女性らしくない言葉」(unfeminine words) (360)に染まっているというから、男性的性格の人格に現れる確率は10パーセント程度といったところだ。しかし、それが出現したときの攻撃性は「強」と言っている。すぐに拳銃やナイフと結びつくからだ。ただし、この攻撃性はすでに述べたように語り手によって抑制的に操作されている。

こう見て来ると、第二の手紙の最初の訳では、夫人の男性的性格は二重人格的に100パーセント出現してきており、本来の出現確率から逸脱している

ことがわかる。最初の訳では、夫人は完全な男性への変身、男性への憑依状態となっており、男性ペルソナが独立して現れて、夫人の人格的統合性を脅かしている。翻訳者は夫人を率直な男女平等主義者だと思っているのに、この訳では夫人をただの下品で、乱暴なサディストにしてしまう。問題は夫人が下品で、乱暴なサディストといった印象を読者に与えることなく、夫人の山猫的性格（男性的攻撃性）をどう表現したらいいか、しかも「女性らしくない言葉」も用いなければならないという難問だ。

13. 難問を打開するハートル夫人の第二の手紙新訳

そこで翻訳者は手紙を新たに次のように訳すことにした。

ポール・モンタギューさま――

私はたくさん非道な仕打ちにあってまいりましたが、いろいろな非道のなかでもこれほどひどい、許し難い、――男らしくない仕打ちにはあったことがございません。あなたさまのようにここまで卑怯者で、ここまで不実な嘘つきには会ったことがございませんの。私が減ぼした哀れな卑劣漢は、酒に狂って、ただ身勝手な振る舞いをしただけです。カラドック・ハートルでさえこんな非道を計画したことはありません。何ということなさるのでしょうか。――あなたはもともと厳かな義務を伴う男女の縁を私とお結びになったあと、――その結びつきが私の全生活に深く浸透するころになって――、これがあなたのお考えに合わないから、もう続けても無駄だとでもおっしゃりたいわけ？ よく考えてみると、アメリカの既婚女がイギリスの未婚娘ほども快適にしてくれないとおわかりになるから、――それで続けてみてもみな無駄だとでもおっしゃるのかしら！ 私には兄も、身近な男性もおりません。――もしいたら、あなたにこんなことをなさる勇氣はございませんね。あなたは卑怯者に違いございません。

あなたは償いについておっしゃっています！ お金のことをおっしゃっているんでしょう？ そうはっきりおっしゃっていませんが、お

金を意味しているに違いありません。それはいちばんひどい侮辱でしょう。ですが、懲罰についてもおっしゃっています。では、申しあげておきたいです。おれはあんたに懲罰を加えてやる、って。約束通りあんたはおれのところに来てくれ。——来てくれたらおれの手には鞭が握られているのがわかる、って。息切れするまであんたを鞭打ってやるぜ、ってね。鞭打ちのあと、あなたにどうする勇気がおありになるか——暴行の罪で裁判所に私を突き出されるか——拝見させていただきます。

そうですね。いらっしゃってください。来ていただきます。私がする歓待は今お教えしました。この手紙が届くころには鞭を買ってお待ちします。そんな武器の選び方を私が心得ていることをあなたにわからせてさしあげます。あなたに来るよう求めます。ですが、もしあなたが恐れて、約束を破るなら、私があなたのところへまいります。あなたがいらなくなるくらいロンドンを熱くしてさしあげます。——あなたを見つけ出せなかったら、あなたの仲間みなに私の話を持ってまいります。

今私の精神状態をできるだけ正確にあなたに申しあげました。

ウィニフレッド・ハートル

第二の手紙には非人称主語構文はなく、書き手である夫人＝「私」と、相手のポール＝「あなた」だけが主語になる。翻訳者は相手のポールに対しては尊敬語と丁寧語を、書き手＝「私」については謙讓語と丁寧語を用いて訳している。男性的、脅迫的に直接相手を叩くより、このように相手を高い位置に置き、「私」を低い位置に置く表現のほうが、むしろ皮肉が効き、慥慥無礼で、高圧的で、効果的な女性の攻撃としてふさわしいと¹³判断した。「おっしゃりたいわけ?」「おっしゃるのかしら!」の部分では、夫人が一時的に冷静さを失った状態を表現するため丁寧語を欠落させて女言葉にした。「おれはあんたに懲罰を加えてやる、…約束通りあんたはおれのところに来てくれ。——来てくれたらおれの手には鞭が握られているのがわかる、…息切れするまであんたを鞭打ってやるぜ」の部分では、「女性らしくない言葉」を引用のかたちに入れて¹⁴、夫人の山猫的攻撃性を直接表現することにした。この表現形式なら、夫人の男性的攻撃的性格の出現率¹⁵を保持することができ、

女性らしさや人格的統合を損なうことなく、直接的脅迫と同じくらいに強い攻撃をポールに加えることができるだろう。

14. 結論

翻訳者は作中人物や語り手を把握したうえでハートル夫人の二通の手紙を具体的に訳出してみた。第一の手紙では「ほかのどの女性がお慕いするよりも、あなたをお慕いしている一人の女が、ここにいることをいつも覚えておいてください」の文に代表されるように、夫人の女性的な面を強調して訳した。一方、第二の手紙では女らしさを失わない発話のかたちを維持しながら、「おれはあんたに懲罰を加えてやる、…約束通りあんたはおれのところに来てくれ。——来てくれたらおれの手で鞭が握られているのがわかる、…息切れするまであんたを鞭打ってやるぜ」という攻撃的な男言葉もワンポイント的に差し込むことができた。男言葉を過度の敬語体のなかに埋め込むことによって、檻に閉じ込められた山猫という夫人の実存状態さえ表現することができたと自負している。日本語表現の、特に日本語のジェンダー表現の多様性と柔軟性のせいで、むしろ適切な訳を見つけ出すのが難しい課題になっていると翻訳者は思う。

(註)

- ① 本稿は2021年11月20日日本語ジェンダー学会第21回年次大会パネルディスカッション「翻訳からみたジェンダー」で口頭発表した内容に加筆訂正したもの。
- ② いわゆる異質物語世界的物語言説だ。ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール』（水声社、1991）p.288.
- ③ Anthony Trollope, *The Way We Live Now* (Oxford World's Classics, 2016), p.357. 以下引用に当たってはこの版からのページを丸括弧内に数字で示す。
- ④ 語り手は郷士のロジャー・カーベリーをイギリス紳士の理想として形象化しており、ポールはこのロジャーを崇拜している。
- ⑤ このイギリス紳士のジェンダー規範の背後には、ピューリタンの考えが隠れているように見える。ピューリタンの内容で有名な『ジェーン・エア』（1847）では、主人公のジェーンは前妻バーサ・メイソンの死をロチェスターとの再婚の条件と

している。ポールは前夫ハートルに対してジェーンが前妻バーサに対するのと同じ態度を見せる。彼はハートル夫人の過去の噂を聞いたとき、夫人との関係を断てという命令をピューリタンのな上位自我から聞いているようだ。

- ⑥ この部分の記述は猿谷要『西部開拓史』（岩波書店、2019）p.115. p.117. p.176. 及び、ジョアナ・ストラットン『パイオニア・ウーマン』（講談社、2003）p.61. pp.72-3. p.77. p.80. pp.104-5. pp.172-3. p.337.に依拠する。

⑦ 『今の生き方』では

- (i) ポール——ヘッタ・カーベリー——ロジャー・カーベリー
- (ii) ハートル夫人——ポール——ヘッタ・カーベリー
- (iii) サー・フィーリックス——マリー・メルモット——ニダーデイル卿
- (iv) ルビー・ラッグルズ——サー・フィーリックス——マリー・メルモット
- (v) サー・フィーリックス——ルビー・ラッグルズ——ジョン・クラム

という五つの三角関係のプロット・ストランドが物語の骨格を形成している。

- ⑧ 語り手はハートル夫人の山猫の性格を骨抜きにすると、初期に意図した夫人とヘッタ・カーベリーの対照関係を曖昧にしてしまう結果を招いている。

- ⑨ こういう場合の「読者」はだいたいかく言う翻訳者の「私」であり、ハートル夫人をひいき目に見るのは翻訳者のマザコンのセクシュアリティのせいかもしれない。ハートル夫人は物語の最後でジョン・クラムとルビー・ラッグルズを結婚に導く縁結びの役をはたす。したがって、語り手はポールとヘッタの関係を邪魔しない範囲内でハートル夫人を受け入れて描いていることになる。

⑩ 翻訳者は学会発表時点ではこの訳を採用していた。

- ⑪ ヴァージニア・ウルフ『オーランドー』（ちくま文庫、1998）p.188.

⑫ ジェンダーサイエンス(1)「男×女 性差の真実」-NHKスペシャル-

- ⑬ 因京子は女性が「中立的及び男性的表現を用いること」は必ずしも攻撃性につながらないこと、「攻撃的発話の中の女性ジェンダー標示形式使用は、非伝統的行動と女性性保持を両立させることになり、女性の行動に対する伝統的な制限への挑戦」となりうること、「通常の発話には用いない極端なまでに女性的な表現を多用しながら、攻撃的な言語行動や『品格に欠ける』とされる内容についての発言を行うという、いわば女性ジェンダー標示形式を鎧として戦略的に用いる」方法の有効性、端的に言うと、野村沙千代よりデヴィ夫人のほうに迫力があることを指摘している。「翻訳マンガにおける女性登場人物の言葉遣い——女性ジェンダー標示形式を中心に——」『日本語とジェンダー（7）』（2007）p.13. p.17.

- ⑭ 最初の訳では引用による男言葉の埋め込みは、中立語の使用から男性語の使用に移行するただスイッチの役割しかなかった。

- ⑮ 第二の手紙のこの訳でハートル夫人の全発話文字数は1,005語、男言葉の全文字数は82だから、全発話に占める男言葉の出現率は8.1%になっている。

